

ワークショップ “Minimally Invasive Treatments” を開催して

新田澄郎（第一外科学）

井手博子（消化器外科学）

内科系，外科系を問わず，より少ない侵襲によるより大きな治療効果は世の趨勢であり，特に外科系では 1980 年代後半に内視鏡外科手術が導入されて以来，minimally invasive surgery の発想と相俟って 1990 年代に燎原の火のように本邦内に普及し，外科手術の概念に大きな変革がもたらされた。

このような背景から，先の東京女子医科大学学会幹事会において標記のタイトルの下にシンポジウムを組むこととなり，演題募集を行った結果，学内各部署から内科系・外科系を問わず広く多くの分野から多数の演題が寄せられた。

同一テーマにこのように全学的に多数の演題のご応募をいただいたことはかつてなく，折角のご応募でもあり，また，広い分野からのビデオ発表が多いことから，このテーマに関する学内の現況を通覧できる好個の機会となることを思い，当初のシンポジウムの予定を急遽，ワークショップに変更し，若干の調整の上，24 題を大まかに V ブロックにグループ分けしてご発表いただくこととなった。

このため，午後 2 時から 6 時過ぎまで 4 時間超に及ぶ長時間となったにも拘わらず，各演者にご発表いただく時間が短く，内容を圧縮されたご発表が多かったように想われ，恐縮したが，ご発表の‘触り’を拝聴するだけでその背景となるそれぞれの所属の現況を十分窺うことができた。

また，演者，座長の方々に時間厳守にご協力いただき，長時間に及んだワークショップに拘わらず，ほぼ予定時間に終了できたことは望外であった。

その後の 12 月 1～2 日に開催された第 12 回日本内視鏡外科学会総会ではシンポジウム“標準的内視鏡手術手技をめぐって：4 主題”，およびパネルディスカッション“新しい内視鏡手術手技：5 主題”が取りあげられたが，主題の大半が，本ワークショップに網羅されていたように想われ，また，その折の英国の Sir A. Cusheri の招請講演「Minimal Access Therapy in the Next Millenium」で取りあげられた，2000 年代に向けての minimally invasive treatments に関する進歩，期待の多くの萌芽が既に学内諸処で実践されていることに瞞目し，感銘を覚えた。

本ワークショップを通して，学内の各分野で，“より少ない侵襲によるより大きな治療効果”の発想が定着し，刻々新しい進歩，発展を取り入れながら日常診療に活かされている現状とその将来を窺うことができた。

ご発表いただいた各演者ならびにご司会いただいた座長各位に厚く御礼申し上げるとともに，本学会の一層の活性化を期待したい。